

アムスルだより

No. 8 1994年 7月10日

Akajima Marine Science Laboratory 阿嘉島臨海研究所



〒901-3311 沖縄県島尻郡座間味村字阿嘉179

TEL:098-987-2304

FAX:098-987-2875



サンゴ幼生の行方

阿嘉島での今年のみドリインサンゴの一斉産卵は、前号で予想した通り、5月と6月に分かれて見られ、5月は満月から5日後の30日に、6月は満月当日の23日に始まりました。サンゴの卵の成熟は春先からの水温上昇に影響されるので、毎日の水温測定の結果から積算温度を計算して産卵日の予想の参考にしています。今年は例年に較べ水温の上昇が遅く、5月中旬に25度を越える日はありませんでした(裏グラフ参照)。このため、5月の産卵が満月よりもかなり遅れる結果になったのだと思います。

ところで、生み出されたサンゴの卵は水面で受精し幼生になり、漂いながらいったいどこまで運ばれて行くのでしょうか。それを調べるために、私たちは1991年の産卵シーズンに漂流ハガキによる実験を行いました。これは、産卵直後あるいは翌朝に水面に浮遊しているサンゴの卵の集団(スリック)を見つけ、それと一緒にビニール袋に

封入したハガキを流し、漂着したハガキを送り返してもらうことによって、サンゴ幼生の運ばれた先を推定しようという調査です。しかし漂着したハガキを見つけた人が、見つけた日と場所を記入したハガキを投函してくれなければ調査になりません。なるべく多くの人に協力してもらえよう、新聞、テレビなどの報道機関からも広報していただいたので、ご記憶の方も多いと思います。

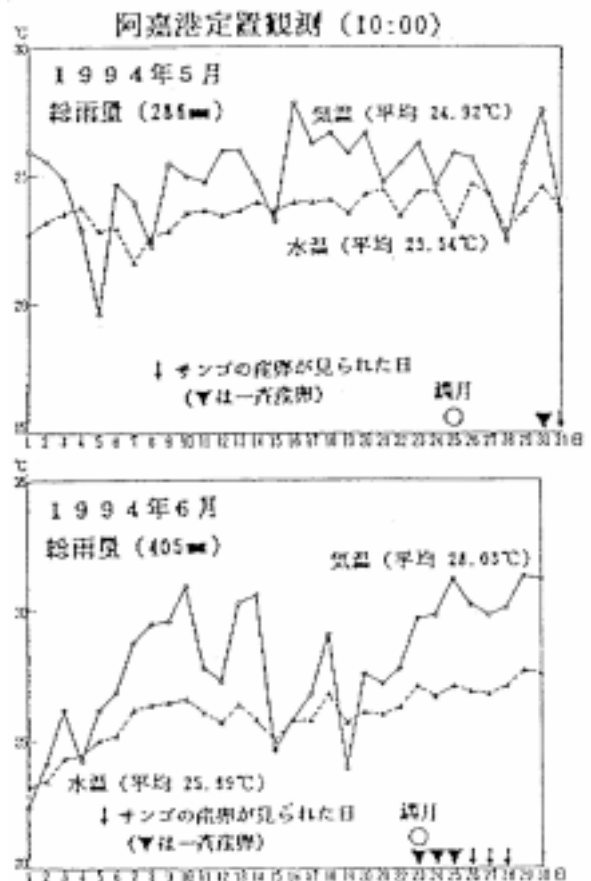
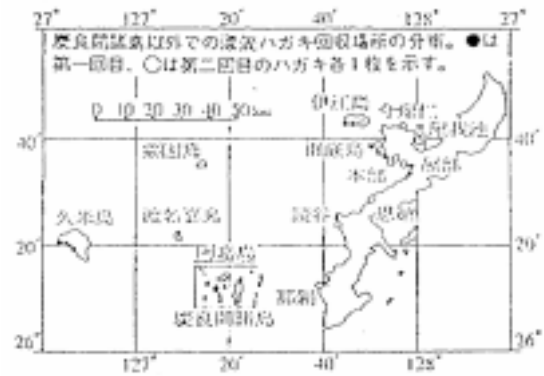
漂流ハガキは5月から8月にかけて合計1000枚を流し、9月末までに回収されたハガキは113枚に達しました。サンゴの幼生は、ピーカーの中では2ヵ月近くも生きていますが、実際に着床できるのは産卵後1ヵ月程度までと考え、放流後30日以内に回収された96枚を調査対象としました。このうち、76枚は慶良間海域の中で回収されましたが、その中の47枚は産卵から4日以内に海岸に打ち上げられたものでした。もし、サンゴの幼生がハガキとともに移動したとすれば、多くの幼生は着床する前に浜に打ち上げられていたと考えられます。慶良間海域以外で回収されたハガキは20枚ありました。このうち17枚が沖縄本島の本部半島など主に北西海岸で発見され、

残りの 3 枚は久米島で見つかりました (右図)。このように、慶良間の海で生まれたサンゴ幼生の一部は約 80 km の旅をして、沖縄本島でも新たなサンゴとして根付いている可能性が示されました。

沖縄本島の周辺では本土復帰に前後してサンゴ礁が荒廃し、90%のサンゴが死滅したとも言われています。現在も赤土の流入などによりサンゴ群落の回復は遅れていますが、最近の調査によると沖縄本島の西海岸の数カ所ではかなり回復してきているそうです。慶良間で生まれたサンゴが育っているのかも知れませんか。慶良間のサンゴ礁は八重山海域の一部とともに、特にサンゴの種類が多く、サンゴ幼生の供給源としても意義深いことが外国の研究者からも指摘されています。この貴重な海をこれからもずっと大切にしていきたいと思います。最後になりましたが、調査にご協力いただいた皆様に厚く御礼申し上げます。

阿嘉島の海より -ウミガメの放流-

昨年(1993年)の5月下旬にヒズシ浜で産卵されたアカウミガメの卵を、阿嘉小中学校の子供たちが学校で孵化させました。7月13日に孵化した子ガメのほとんどは4日後海に放流しましたが、そのうち10匹は研究所であずかり、同じ頃ヤカビ島で生まれたアオウミガメと一緒に一年間飼育実験をしました。子供たちも自分たちのウミガメがかわいらしく、時々様子を見にきます。今では重さ1.5kgほどに成長しています。



そこで、これらのカメに標識を付け、小中学校の子供たちといっしょに海に放してあげようと思います。うまく育ってくれるといいのですが。またこれに合わせて、サンゴやウミガメなどのお話をしようと思います。地元の子供たちに、私たちの住む慶良間の海のすばらしさを、少しでも理解してもらえれば幸いです。